
3 ページ

紗渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3ページ

【Nコード】

N7808L

【作者名】

紗渚

【あらすじ】

隣の彼は人気者―

あの教室の彼は気になる人―

そして私はひねくれ者―

？ アメ（前書き）

新連載です

キミがくれたの方もちゃんと更新しますよ

大丈夫です

S a n a m (m

？
アメ

【1】

.

.

私の世界は

小さい液晶画面の中にある

何故かって？

わからないよ

そんなこと

私が知りたい位だ

||
||
||
||
||
||
||
||

「おはよー」

「よっす」

教室の中

数々の挨拶が聞こえる

そんな中

私は一人教室の端の席で
なんとなく外を眺めていた

この高校に入ったのは

今から二週間前

入学式に満開だった桜は、

もう既に新緑が見えてきている

私は教室ではいつも一人だ

中学のころの友達に

ほとんどが違うクラス

…でも、このまま一人でも別に構わない

そう思っている

周りの人達もほとんどが上面の友情を掲げている

ほら、あそこにも

「宮島く〜ん。金かして」

「え、でも…」

「なんだよ俺達、「友達」だろ？」

「う、うん…」

「友達」を何かに利用して自分の利益にする

別に私はそれがいけないことだなんて思っていない
むしろ、賢いと思う

自分でもひねくれた考えだと感じている
でも、そんなものでしょ？

「本当、下らない…」

「何が下らないの？出席番号29番の皆瀬風沙さん」

「…？」

「そこ、俺の席」

そう言って目の前の
クラスメートだと思われる男子は
今、私が座っている席に指差した
…が、
そんなこと
私はわかっていて
分かっていて
ここに座っているのだから

「…分かってる」

「うん？…まあいつか」

「…いいんだ？」

「うん！代わりに俺が風沙サンの席に座るから」

そう言っただけで彼は私の隣にボスツと座った

（あんまり変わらないじゃない…というか近い）

…いきなり

名前で呼ばれたことに
軽い人だなあと思った
名前と言えは

私は彼の名前を知らない

クラスの人間に興味はない

だから、何日か前にやったはずの自己紹介は
適当に済まして、後は聞いていなかった

そう言えば隣の自己紹介は騒がしかった気がする

私の隣ということは35番…

「変な人…」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

…HR

「今日は新しい教材を配るぞー」

「先生！俺ネームペン忘れましたあー！」

ネームペン…

素直にマジックと言えはいいものの
懐かしい表現するものだ

「^{ワナミ}和波…頑張れ」

「みつちゃん酷い!!」

「三井先生な」

「^{ケイト}慶人だっせー!!」

「うるせー!!」

どうやら彼は

和波慶人というらしい

確かにそんな名前の人
がいたような…

気がしないでもない

前から配られてきた

真新しい教材に名前を書く
ペンのふたを取ると

気持ちよく

『ポンッ』

と音がした

人生で自分の名前は何回書くのだろうか？

1000回10000回100000回？

まあ、そんなことはどうでもいいのだが…

名前を書き終わった私は

ペンを筆箱に入れる

その時

隣から異常な視線を感じた

「風沙さん…」

「…なに」

「…ペン貸して？」

語尾に何やらハートマークのついたような甘い声に

一瞬鳥肌がたつたが

貸さない理由もないので

無言で彼に差し出した

すると和波くんは

パッと顔を明るくして

「いいの！？風沙サンありがとう！-！」

「べ、別に…いい…けど…」

『ありがとう』なんて

最後に言われたのはいつだろうか

それがなんだか照れくさくて
顔をそむけてしまった

「…できたつと！」

「じゃあ、返して」

「あ、ちよつと待って！」

「？」

和波君は「こそ」と

制服のポケットを探りだす
色々ものが大量に出てくる

（四次元ポケ•ト…）

ようやく見つけたのか
嬉しそうにそれを

手にとり握り締めた

和波くんは

「ん」

と私に手を差し出すように施した

それに大人しく従った私

「はい、お礼」

「アメ？」

手のひらには

リング味のアメ

それをしばらく見つめていた私に

和波くんは早く隠すように言った

慌てて隠そうとしたが

それは叶わず先生に見つかってしまった

「これ、没収な」

「えっ！そんなぁ！！」

「あ、先生待ってください！」

思わず立ち上がってしまったが
なんとはいえいいのか
分からない

そもそも立たなくても
よかったんじゃないのか？

…が
今更考えてもしょうがない

「なんだ？アメだろ？没収だよ没収。」

「いえ…それは…」

「それは…なんだ」

「父の開発した魔法の薬…です」

ああ、もっと気のきいた言い訳は思いつかないのか

完全にバカにされる…

と思ったが

「ほお、皆瀬のお父さんはすごいなあ」

は？

「なら、しょうがないなあ、返すよ」

ああ、どうも…って

信じちゃうんですか先生

そのアメは私の手のひらに置かれ

その時間はずっと

ポケットの中に入れていた

|| || || || || || || || || ||

… 休み時間

「風沙サン最高!!」

「うるさい」

隣でやけに大声で笑うのは
和波くんだ

「イヤ、だって普通言わないもん!!それを信じるみっちゃんも凄
いけど!!」

「うるさいってば」

それでも笑うのを
一切やめようとしな

いと

教室の隅で

女子が私をみながら

何かコソコソと話していた

「ねえ…あの娘^こって皆瀬さんだよね…」

「妙にけーちゃんと仲良くない？」

「普段目立たないよね…」

「うわー…残念なんですけど…」

めんどくさいなあ…
だから

目立ちたくなかったのに

どうやらよりによつて

この隣にいる男は

クラスの人気者のようだ

さつさと離れて

静かにくらそう

そう思つて

和波くん^{わな}に話しかけた

「和波くん、もう私に話しかけない方がいいよ…」

「なんで？」

「キミの株が落ちるだけだから」

カバンに入れっぱなしの
小さな文庫本を出して
適当にペラペラと開き、
とめる

ふと、静かになったので
いなくなっただのかと顔をあげると

「…なにしてんの」

「ん？観察」

「それにしたって近いから…」

「だって見えないし」

「だから話しかけないでって…」

「イヤだ」

もう

本当にやめて欲しかった

ため息を漏らすと

少し顔をゆがめる

目の前の男に

はつきりと言ってやろうかと思ったが

さっきの女子がきたせいで

言えなかった

「けーちゃんて皆瀬さんと仲いいのー？」

「んー？」

違つと言おうとしたら

勝手に

この男は答えてしまった

「俺は

仲良くなりたいよ?」

女子の凍りついたような顔

もう、

本当に勘弁してほしい

.

.

【next】

？ ・アメ（後書き）

和波って名前がなんか好きです（´ω´*）

これからまたよろしくお願いします

（^ - ^）ノシ

S a n a

|| || || || || || ||

n e w キ ャ ラ

ミナセ ナギサ
皆瀬 凧沙

ワナミ ケイト
和波 慶人

ミツイ
三井 先生
通称 みつちゃん

|| || || || || || ||

？
友達

【2】

「なんで、あんな事言っただの……」
「んー？」

帰り道
既に見慣れたこの道
今日は何故か一人ではなく
二人。

「あんなことって？」

「だから、仲良くしたいとか…どうとか…」

「あー、そんなの」

「？なに」

「仲良くしたいから？」

平然と言い放ったこの男に

思わずため息を漏らした

それでも和波君は

相も変わらず

ニコニコとしている

いい人なんだか

変な人なんだか

正直分からない

「だから、なんで和波君は私と仲良くなりたいのかって聞いて…」

「あ、それは自信もっていえる！」

「…なに」

「あんな…」

まあ、理由なんて最初から期待してない
と、言うか私と仲良くなりたいと思えた
その時点で和波君は
結構な勇者なんだ
私の中で

「優しいから」

「…あつそ」

無難で
それでいて
人を傷つけない
最高の言葉

”優しい”

予想どうりすぎた返答に
今度はさっきよりも
少しだけ、
大きめのため息をついた

「ハアアー」

…少しでは、
なかったかもしれない

「なんで、ため息？」

「なんでって…」

「無難で分かりやすいでしょ？」

どうやら狙っていたらしい
和波君は最初から
私と仲良くする気など
ないようだった

…きつと

「言っとくけど」

「？、なに？」

「私、勉強そんな得意じゃないから宿題とか見せてあげれないし」

「ん？、うん。」

「忘れ物とかもしょっちゅうだから」

「……だから？」

人と話すのは

これだから面倒だ

と、言うかここまで言えば
普通わかるでしょ

「私をパシってもなんにもなんないよ」

「……パシる？……ふっ……」

「……？和波君、なんで笑ってんの……」

ちらりと見れば
和波君は肩を震わし
口を手で押さえ

必死で笑いをこらえていた

その意味が分からなくて
少し待ってみたが

早く家に

帰りたくなつたから
ほっとくことにした

…しようとしたのに

「風沙サン、ストップ!!」

「…なに、まだなんかある?」

すると和波君は嬉しそうに駆け寄ってきた
そして、

「仲良くなりたい理由。」

「…?」

「風沙サン…優しいし」

いきなり腕を掴まれた
状況把握する事は許されず
そのまま疾走
…もとい
引きずられていた

「なにより…面白い!!」

訳が分からない男子は
この世には沢山いるけれど
それは常識の範囲内だ

どこの高校生に
女子を無理やり引つ張り
連れていく男子が
いるだろうか

どこの高校生に
ここまで青春オーラ
満開の男子が
いるだろうか

ただ、風を感じていた私は
気がついたら知らない家の前にいた

「どっ... っっ...」

人間は顔がひきつると
異常に筋肉使うんですね

人間は腕を掴まれて
異常に引きずられると
そこまでの記憶が
あやふやになるんですね

帰ったら
お父さんに教えてあげよう

「っっ？」

私の高校生活の予定が
この日一気に崩れました

「俺ン家」

一人のおかしな
友人ができたせいで

|| || || || || || || ||

… 和波家

「もう、帰っていい？」

「えー！！なんで！！」

なんで？

帰りたいと思ったから

そう和波君に言えば

彼はあからさまに

シヨンボリとしていた

今この人に動物の耳をつけたら、完全に折れている

「で、なんで連れてきたのよ。家なんか」

「うん？…うん…」

出された紅茶を少し啜り
カップを置いた

彼はまだ

「うーん…うーん…」

と悩んでいる

…かと思いきや

いきなり顔を上げ

「うん！衝動！！」

「……………ああ、そ」

とことん

呆れられるために
産まれた人だな

そう思いながら
嬉しそうなその顔に
一応こちらも

苦笑い

という形で返しておいた

そのあと

結局、私は和波家に
外が茜色になるまで居た

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

… 帰り道

「なんか、どつと疲れた」

高校生になって
久しぶりにこんなに長く
人の話を聞いた

「… まあ、でも…」

結構楽しかった
だから、

よしとしよう

今日はなんだか
いつもの帰り道が
違うように感じた

それが

時間帯のせいなのか

それとも

私の心境のせいなのか

分からないけれど

なんだか

良い気分だから

考えるのは止めた

「あ、そういえば」

明日は授業で

選択授業を決めるんだった

何にしようか

やっぱり
目立たないような
ものにしよう

|| || || || || || || ||

『風沙サン、困った事があつたら言えよ!!』

『なんで』

『え?だって俺ら親友だろ!?!』

『ああ...』

あ、そういえば
いつから
私達親友になつてたの?

【next】

.

？・友達（後書き）

お久しぶりの

第2話ですね…（^ - ^；

勉強勉強勉強勉強…

エンドレスッ（壊

もうね

こう暑いと

進むもんも

進まないってヤツです…

そんなことより

第3話ですが

ものっそい

先になると思います

ですが

キミくれは頑張っ

うん。

頑張っで終わらせたい…！

終わるか微妙ですけど…

でわ

また会える日を…ノシ

||
||
||
||
||
||
||
||

S
a
n
a

？・変化

【3】

…次の日

今日は金曜日

週末で明日は休み

部活に入っていない私は
いつも学校が終われば
直行で家に帰る

そして、気が済むまで
ゴロゴロする

ただ、それまでの
時間が憂鬱だった

週末の疲労からの眠気
嫌いな教科は
半分以上

憂鬱以外の
何物でもない

それも今日でおさらばだ

なんてったって…

「そついや、今日から選択授業はいるねえ」

「そうだね」

「風沙サン、授業何？」

「数字」

「へえー頭いいんだねえ、俺は体育ー！」

淡々と会話をしているけど

今、私の中はお祭り騒ぎな状態な訳で…

そう、今日から

金曜日の6時間目に

選択授業がある

好きな科目を

好きなだけできるんだ

今から

それさえ思えば

疲れなんて目じゃないし

嫌いな教科なんて

どうにでもなる

とにかく

楽しみで、楽しみで

しょうがなかったんだ

「そんなに、楽しみ？」

「え、そ、そんなこと、ないけど」

「風沙サンってある意味、正直だよね」

「……………」

顔にすぎた、みたいだ

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

… 六校時前

… 休み時間

「はやくいこー」

「教室どこだっけえ？」

それぞれ、各々のクラスに移動を始める

ほとんどの人が、誰かと一緒に教室へ向かう

笑顔を交わしながら

仲良さそうに、

「じゃあ、風沙サン！！俺も行ってくんね！！」

そう言つて

和波くんは廊下に出ていく

遠くから

「慶人ー、早くしろよー」
と聞こえてきた

きっと違うクラスの
友達だろう

(…なんか)

私の知ってる和波くんなのに、
なんだか違和感を感じた

(あ、そっか)

今まで何でもないように
私の近くにいた和波くん

だけど、本当だったら
そんな事ありえない訳で、

それを突き付けられた
そんな感覚

（…ん？これじゃまるで私が寂しいみたい…）

そんなことありえない
頭を左右に軽く振った

（私が、自分自身で、決めたんじゃない）

1人であること
その方が楽だから
面倒じゃないから

（そう、だ…）

なんとなく

憂鬱がのし掛かる

こんなもの

背負う予定はなかった

「…行こつと…」

筆箱と大学ノートを手

席から立ち上がった

時間に余裕はあったけれど

私は、何かを

打ち消すかのように

少し走って教室へ向かった

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

… 学習室

「はい、という訳で選択、数字を担当する越後です。じゃあ早速問題集配るぞ」

教室に入ると

私を入れて5人だけ

男子2人と女子2人

私の席は真ん中の一番前

先生の前

(ま、別に越後先生ならいつか…)

先生とは家が近所で

小さい頃からの付き合い

目が合えば軽く笑う

「さ、てと全員もらったかあ?…よし、じゃあ」

「「「?」」」

「人数も少ないし、自己紹介やるかつ！」

「うえ！」

あ、今は隣の子だ
たしか、五組の…？

「今、うえ。って言ったお前からな？」

「Σまじで？」

その子は立ち上がり
自己紹介を始めた

「五組の前田裕子マエダ ヒロコです！よろしくね！」

素直に可愛い子だ

身長は160位だろうか…

ショートカットが似合う

笑顔の眩しい子だった

「はい、つぎー」

「一組の三宅ミヤケ小百合サユリです。よろしくお願いします」

次はロングヘアの
黒髪眼鏡だ…

いかにも清楚…
なんて、言うか

「なんか、THEお嬢様だなあ…」

私の気持ちを隣の男子が
代弁してくれた

その男子が立ち上がった

「さて、俺の番だな。四組の松岡駿^{マツオカユン}です。」

彼はたしか…

時期生徒会長だとか噂の

四組を覗くと

いつも松岡くんの周りには

男女関わらず人が集まっていた

「そして、」

松岡くんは自分の前で気持ちよさそうに眠る

男子の頭をたたいた

顔がよく見えない

「こいつは俺とおんなじクラスの渡辺秋羅^{ワタナベ アキラ}ですー」

「んー…？」

渡辺と呼ばれた男子は
眠そうに頭を上げた

その顔を見た瞬間

時が、とまった気がした

(…あ)

数秒たつと

相手も驚いた様子で、

「秋羅？どした？」

という声が聞こえてきた

おたがい目をそらして

下を向いていた

すると目の前から

「風？次お前だぞ」

「へ？あ、はい」

私は慌てて自分の自己紹介をはじめた
何故か無駄に緊張している

何を話したか
全く覚えていない

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

…

「はい、じゃあおわり。教室かえれー」

いつの間にか
授業は終わっていた

今日はなんだか集中できなかったと
ため息をつきながら机の上を片付け、
立ち上がるうとした瞬間

目の前に影ができた

「……………」

そつと顔をあげると
そこには渡辺がいた

「あのさあ…もしかして…凧ちゃん？」

「え…」

「あ、間違ってた？ごめん知り合いと名前が同じで」

「6年3組…？」

「…やっぱり」

彼は小6の時のクラスメイトだった
ただ、それだけで

あんな風に見つめあった
あの瞬間は何だったんだろう？

「やっぱり風だったんだ…これからよろしく」

「あ、うん…」

「じゃ、」

そう言って
小さく笑った彼に

トクンとひとつ

胸がなった
気がした

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「風沙サンおかえりー」

「ああ…。」

「…なんか、あつた？」

「え、なんでよ…」

「なんか」

「嬉しそうな顔だから」

.

.

【next】

？
階段

【4】

「なんかニコニコしてる風沙サン気持ち悪いね」

そう爽やかに笑いながら
話してくる顔を見ると
若干悪意を感じる

「やだなー悪意なんてないよお」

「心読まないでくれる？」

今日は土曜日

再来週にある実力テストのために勉強がしたいと
和波くんから電話があったのは今朝のことだ

まだ寝ていたかった私は、勿論断ろうとしたが

『風沙サンたすけてー』

『悪いんだけど…』

『もう風沙サン家の前にいるからねー？』

『…は？』

と言う風に

なんで私の携帯番号知ってるんだとか
私の家知ってるんだとか

疑問はあったけれど

仕方なく着替えて

玄関をでて今に至る訳だ

「だってさー、ニコニコしてるじゃん」

「してない」

「ていうかニヤニヤしてるよねー」

「和波くん、もう帰っていいのかな？」

「ええ！？ごめんなさい！！」

さっきまで隣でニヤニヤしながら歩いていた、
そんな和波くんは
私の前に回り込んで
両手を合わせて謝ってきた

「…もういいから」

「やたっ！」

土曜日の校舎にはどこかの運動部の掛け声と
吹奏楽部の演奏が聞こえる

図書室につくと

妙な静けさに違和感を覚えた。まるで違う世界だ

「時に風沙サン、俺なにを勉強すればいいのかな？」

「は？…えーと…ちなみに和波くんは何が分からないのよ、数学なら…」

「全部!」

「……………」

頭が痛くなってきた

|||||

「だから、ここにこれをあてはめて…」

さつきから何度同じことを繰り返しているのだろう
取り敢えず得意な数学から始めが
どれだけ細かく教えても

『わかんないよ』

と、ペンを投げ出す
今も必死で教えている
のに、隣を見ると絶望する
気持ちよさそうに寝ている

「……………」

まあ、一時間頑張ってたし
少しだけならいっか

休憩がてら図書室を出た
休みの日の教室は静かだ

いつもは足早に歩く廊下をゆっくりと歩く

——カッンカッン

自分の足音とどこからか聞こえるトランペットの音色をBGMにして歩く

階段から吹く風が
あまり短くないスカートを揺らしている

——ザァ…

一際強い風が吹けば
無意識にスカートを髪をおさえる

「あ……風……？」

見上げればそこには背の高い男の子が一人
階段に座って
本を読んでいた

「あ、…部活？」

「ううん、俺は帰宅部だから。駿をまってるんだ」

「…そっか」

会話が続かなくて
なんとなく笑った
そしたら彼はクスリと笑う

「ここ、風が凄く気持ちいいんだ」

自分の隣を本をもっている手とは逆の手で叩いている

「え？」

「きなよ」

「あ、うん」

焦ってそこに座れば
穏やかな風が髪を浮かせる

「あ、のさ秋羅、くん」

「秋羅でいいよ、なに？」

「秋羅は本、好きなの？」

ん？とした顔をした

そして本をもった手を見て、ああと納得したように

「これは、前から好きなんだ。これだけな」

「へえ…」

「風は変わらないよな」

「…そう？」

秋羅はゆっくりと私の顔を見た。そして少し笑って

「うん。…風だ」

「……ッ」

たったその一言で

よくわからない
今まで感じたことのない
胸の締め付けられる

感情

キュッて音になった

「…風？」

「え、あ？え？」

「どした？」

感情に追い付かない思考がグルグル旋回する

どうすればいいのかわからないまま固まっていた

「大丈夫か？」

秋羅の手が私の方に伸びた
その手は私に触れる前に、
止まった

「……？」

秋羅の手を掴んでいたのは

「ハアハア」

息を切らした

和波君だった

「和波くん？」

【next】

？・序章

【5】

・

腕を掴まれた

「…和波くん？」

そのまま引つ張られ
私は転びそうになる

「行こう」

支えてくれた和波くんは

腕をひき走り出した

「ナギ！」

遠くから秋羅の声が聞こえた気がしたけれど
引かれる勢いに
追いつくのに必死で
振り向くことはできない

「ちょっと、止まってってば!!」

「……………」

話し返すことも
振り返ることもしないで
まっすぐに走る和波くん

「…このっ…」

なんの返事もしない
それに苛ついた私は
和波くんの背中を思いつき叩いた

「！いったあ！！」

ようやく止まったが
私の体は止まることなく
和波くんの背中に倒れる

「わっ！！」

——ガッ！

「いった！！」

|| || || || || || || ||

漸く振り向いた彼の手を無理やり放して
息を整える

和波くんも涙目で背中をさすり息を整える

やっと落ち着き

私は和波くんを見た

「ちょっと、和波く……」

怒ろうとして

息を吸った、けれど

目の前にいる彼の顔をみたら息は全て吐き出された

「……なんて顔、してるのよ……」

思わず笑いが込み上げる

何故かって、

怒ろうとした相手が

今にも泣きそうな顔をしていたから

「……ははっ」

「な！なんで、笑うのさあゝ……」

「……ごめっ……ふふっ……」

暫く笑っていると

和波くんが黙っていることに気が付いた

少し頬が染まっっていて

何かに耐えるように

唇を結んでいる

「な、なに…」

「風沙サンが…笑ってる」

「そりゃ…」

笑うでしょ、

そう言おうとしたら

また腕を引かれた

でも今度は走ることはなく

そのまま和波くんの胸に倒れ込んだ

私は何が起こっているのか分からず

固まったまま

背中にまわっている和波くんの腕が強まる

「…なに…」

「…か…い…」

小さい声で

何かを言う和波くん

その肩が小さく震えているのが見えた私は
ゆっくりと自らの腕を彼の背中にまわした

|| || || || || || || || || ||

「で、なんでいきなり私を連れ出したのよ」

さっきまで私を抱きしめていた男は
今、私の前で正座している

「……だつて……」

「だつて、なによ」

「……………」

決して私と目を合わさずに
そっぽを向いてふて腐れているこの男の顔を
無理やりこちらに向けて

「言いなさい」

「……だつて……!」

いきなり大声を上げた
少し驚いたけれど
和波くんが再び俯いたから
しゃがんで和波くんと同じ高さになる

「……だって……風沙サンがアイツと、仲良くしてたから……」

「なんでよ、別にいいでしょ？」

「……よくない……」

いまいちわからず首をかしげて
次の言葉を待つ

「風沙サンは……俺と一番仲良しなんだもん……」

「はあ？ 私は和波くんとか仲良くしちゃいけないの？……大体、秋
羅は……」

「ほらソレえ！！」

人差し指を真っ直ぐ私にむけて大きな声で言った
その指に必然的に視点が移り周りがぼやけて見える

その指をゆつくりとどけ
何度目か分からない溜め息を小さく吐いた

「……俺は、俺のことは『和波くん』なのに……アイツは名前で……」

「…それだけ？」

「……………」

小さく頷いた頭を見て
なんだか可哀想に思えた

その頭を小さくコツンと突いて立ち上がる
途端に上げた和波くんの顔が間抜けすぎて
私の口角が少し上がる

「…もう、いいから行くわよ」

「え…」

体を反転させて歩き出す

「ま、まってよ風沙さ…」

「置いてくわよ」

その時でた台詞は
ごく自然にでてきた言葉で

なんでそんな簡単に言えたかは解らないけれど
なんとなく

その理由もどうでもいいと

そう、思った

「慶人くん」

「!?!」

入学当初は

友達なんていらないうちで思っていた

毎日、毎日

窓から外を眺めて

その景色が変わって

また1年後、もとの景色に戻っていく

それを繰り返し

その景色の変化を

1人で見つめて行くんだと

思ってた

「風沙サン！今、名前！」

「なに？嫌なの？」

この人の席に座って

この人に名前を呼ばれて

この人にマジックを貸して

きつとあの日

この人に出会っていなかったら――

だから、こう思うんだ

「全然、嫌じゃない！！」

この人が友達になって
この笑顔に出逢えて

――よかったって――

「……ありがとね」

でも、ここまでの出逢いは
始まりであるけれど

まだ私の中の1ページ目にも満たない

プロローグに過ぎなかった

【next…?】

.

.

——
パタパタ

「わりい秋羅あ！部活長引いちまって」

「いや、大丈夫だよ」

この学校に入り一番最初に仲良くなったコイツは

部活の中で早くもエース候補の1人らしい

「またその本か？」

「ん？…ああ」

「よく飽きねえなあ、」

「別に、内容が気に入ってる訳じゃないからな」

「はあ？」

本をもつて立ち上がると
駿も慌てて俺についてくる

——ザア

背中に掛かる春風は
心地よくて
なんでもないのに
気分がいい

「……なあ秋羅」

「ん」

「お前、なんか良いことあったろ」

俺より少し身長の高い駿
駿は俺の少し後ろから
楽しそうにそう言った

「…俺、駿のそういう観察力有りすぎるところ、超嫌いだ」

「お、当たりだ」

「いや、ちょっとハズレかも」

「えー…なんだよお」

「正解は…」

靴を取りだし、落とす

―カタン

―これから起こすんだよ
―良いこと

(彼らの)
(青春のブローグ)

<next

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808/>

3 ページ

2011年10月6日13時57分発行